

## 織田信長と戦った摂津市域の農民

中世は、貴族に代わって武士が台頭し、力を持っていった時代です。支配権をめぐって彼らが争い続けた時代でもあります。鎌倉幕府や室町幕府というのは、武士による全国支配のしくみですが、これらの幕府による支配は安定しない時期が多く、特に室町期には、南北朝の内乱、応仁・文明の乱、土一揆や一向一揆などの動乱が相次ぎ、ついに戦国時代の大動乱に突入していきます。

都に近い地理的位置にある摂津市域は、常に紛争の影響を受け続けていたと考えられています。



石山本願寺合戦図

『石山軍記』より

### 三宅城落城と防風庵

戦乱の続いた時代、摂津市域には、三宅城（三宅）、黒丸城（鳥飼中）、一津屋城（一津屋）という三つの城があったといわれます。

三宅氏は、戦国時代を中心とした百年あまりの間歴史に登場する国人（その地域一帯を實力で支配する地侍）です。通常、国人はいずれかの守護大名の家臣となり、手下の足軽（雑兵）を率いて、戦争の実働部隊となります。

「三宅城落城記」という記録によると、三宅国村・長清の兄弟は、戦国の複雑に推移する戦況の中で、主従関係を次々と変えながら生き延びます。本拠とした三宅城が落城するとき、国村・長清は自害しますが、国村の子ども達は難を逃れ、出家した長女は康阿比丘尼と名乗り、防風庵という草庵をつくり暮らしたと述べられています。現在の三宅小学校の南方が防風庵の跡とされています。

### 浄土真宗の広がり と 石山本願寺合戦

現在、摂津市には 24 の寺院があります。そのうち 20 寺院が浄土真宗に属します。

浄土真宗は鎌倉新仏教として誕生しましたが、民衆の間に急激に広まったのは戦国時代、中でも蓮如が本願寺 8 代法主として教化活動を精力的に展開した頃です。摂津市域の寺院にも蓮如との関係を示すものがいくつも残されています。

蓮如は今の大阪城の所に石山御坊（後の石山本願寺）を築き、浄土真宗の勢力はあっという間に伸びます。本願寺 11 世顕如のとき、全国制覇をめざす織田信長との対立が深まり、ついに戦争に突入します。これがその後 11 年間続いた石山本願寺合戦です。

石山本願寺は頑強に抵抗し続けますが、信長の勢力が周辺各国に広がるにつれて孤立化し、ついに天正 8 年（1580 年）3 月、「本願寺大坂退去」という不利な条件をのんで講和します。

## 流れの馬場と死屍谷

浄土真宗の信者が多く、石山本願寺にも近い摂津市域では、この合戦で一所懸命働いた人が大勢いました。合戦が和議により終結したため、本願寺に籠城していた勝久寺（千里丘東3丁目）の住職頓恵や百姓たちはいったん自分たちの村に帰りました。しかし顕如の子、教如が徹底抗戦を呼びかけ、勝久寺門徒はこれに呼応しました。

天正8年（1580年）5月28日、法話や読経のため多くの人が勝久寺に集まっているとき、ふいに信長の軍勢が来襲し、本堂を焼き払い、集まっていた信徒たちを殺害しました。このとき、血が川となって流れたところが「流れの馬場」と呼ばれるようになりました。

また死体を少し離れた谷に埋めたので、ここを「死屍谷（シカバナタニ）」と呼んだと伝えられています。

## 身代わりとなった木下勘兵衛

明善寺（三島二丁目）の4代目にあたる馬場崎右衛門正義は武勇・知謀共に群を抜き、本願寺側の軍師となり活躍をした人だといわれています。

和睦が成立した天正8年の夏、信長は教如の檄文に呼応した正義を討伐するために、丹羽五郎左衛門長秀の率いる3千騎を明善寺のある味舌に向かわせます。

それを知った正義は、止々呂美村（箕面市）に逃げのび、家臣の木下勘兵衛という剛勇が正義の身代わりとなって戦い、討ち死にしたといわれます。難を逃れた正義は、後に味舌に戻ります。

こうしたことを知った本願寺の教如は、木下家に本尊を贈ります。木下家では「身代わり本尊」と呼んで今に伝えています。木下勘兵衛の供養塔は味舌下（正雀四丁目）の共同墓地にあります。

また、平成8年、木下家では勘兵衛討ち死にの由来を記した石碑と五輪塔を建立しました。

## 味舌と関係深い織田有楽斎

織田信長の弟に織田有楽斎（長益）という人が

います。兄と違って戦いを好まず、茶道の一派有楽流を開いた文人として知られています。

この織田有楽斎は、摂津の味舌に深い関係をもっていました。本能寺の変後、有楽斎は豊臣秀吉のお伽衆となり、味舌2千石の領主となりました。関ヶ原の戦いのときは、徳川方に付き手柄をたてたので、徳川家康から味舌・大和国（現在の天理市、桜井市）とあわせて3万石の領主になりました。大坂夏の陣の後、領地を3等分し、味舌2千石は4男長政が引き継ぎ、戒重藩（後に芝村藩）として、明治になるまで子孫に引き継がれました。

さらに、有楽斎の5男「尚長」は、自分が味舌の地で生まれたからということで、味舌天満宮の現在の社殿を造営しています。今も欄干の擬宝珠（ギボシ）にその年月と名前が刻まれているのが見られます。このように有楽斎と味舌はいろいろと関係していました。

なお、よく知られている東京銀座の有楽町は、かつて有楽の屋敷があったことが起こった町名であるといわれています。有楽は「うらく」と称したのですが、なぜか町名は「ゆうらく」となってしまっています。



味舌天満宮